

2023 年度 関西大学総合情報学部 外国大学部留学生入学試験問題

小論文

注意事項

- 問題は 2 種類あります。問題A、問題Bのうちいずれか 1 つを選択し、解答してください。両方を解答することはできません。
- 解答用紙は、必ず、選択した問題番号用の用紙を使ってください。
- 試験時間は 90 分です。

次の文章を読んで、以下の問い合わせに答えなさい。

【問1】「ドットコム界の陣取り合戦」とはどういうことか。300字程度で説明せよ。

【問2】「ハイテクブームの本丸を真に担っていたのはシスコやオラクルのような企業だった」とはどういうことか、200字程度で述べよ。

【問3】「労働力が希少であれば、経済成長の果実の分け前を大きく取ることができる」という点は、1990年代後半のサンフランシスコのベイエリアにおいて、どのように当てはまつたか。文章全体の内容を要約する形で、500字程度で論述せよ。

歴史的に、労働市場の命運は——その経済圏の中で労働力がどのような使い方をされ、どれだけの報酬を得て、どれほど政治力を主張できるかに表れる——労働力が生産要素としてどの程度希少か、あるいは豊富かに大きく左右されてきた。労働力が希少であれば、経済成長の果実の分け前を大きく取ることができる。その成長がテクノロジー色の強いものであつたとしても。

1990年代後半、サンフランシスコのベイエリアは大好況に沸いていた。世界がインターネットの可能性に目覚め、起業家たちにとって世の中はチャンスにあふれていた。人々がおよそなにをするにもウェブを使うようになることは起業家の目には明らかで、その見方が銀行や識者に、やがてネットで株取引をしているすべての人に広がっていった。従来型の世界にある経済的なニッチと同等のものが、ネットの世界にも存在するはずだと多くの人が考えた。ネットの銀行、音楽販売、ペット店、大学などだ。ウェブが競争の力学を変えるだろう各市場に一番乗りすることは、紙幣印刷のライセンス権を買うようなものだった。

鼻の利く人間がドメイン名を買って最低限のビジネスモデルをひねり出し、会社を株式公開して百万長者になったら引退する（当時はそれが理想とされていた）ことが可能だった、ドットコム界の陣取り合戦が始まった。ネットのペット用品販売会社で広告に巨費を投じたあげく倒産した「pets.com（ペッツ・ドットコム）」や、同じく大失敗したネットのファッショング通販会社「boo.com（ブー・ドットコム）」のような企業にとっては希望に輝いていた時代だった。だが派手な話題が世間を席巻していた陰で、アメリカの情報技術ネットワークを形成するハードウェア・ソフトウェアのインフラ建設というもつと重要なプロジェクトが進行していた。情報インフラはpets.comやその同類が死に絶えたあとも息長く残ることになる。ハイテクブームの本丸を真に担っていたのはシスコやオラクルのような企業だったのだ。

当時見えていなかったのは、テクノロジー熱でいちばん得をするのは誰か、だった。テクノロジー分野の大型投資家か、新しいテクノロジーを利用する顧客か。ブームを仕掛けたハッタリ屋の起業家か。ふたを開けてみれば、答えはそのいずれでもなかつた。この時代に生み出された大きな利益はまったく違うところに流れた。利益をものにしたのは、同じくブームの参加者で、投資家やベンチャー創業者や顧客よりも数が足りない人々だった。

ドットコム熱では実は、人が思うほど起業が活発に行われたわけではない。1996年から2000年までのシリコンバレーの起業率はアメリカの他の経済圏のそれを下回っている。当時は大企業の労働条件があまりに居心地が良く、飛び出して新しい会社を始めることができたが、それほど魅力的に見えなかつたのだ。理由は、圧倒的な人手不足である。

ベイエリアの失業率はハイテクブームのピーク時に約2.5%にまで落ちた。シリコンバレーの平均所得はカリフォルニア州どころか全米のどこよりも早く上昇し、他のほとんどの都市部の平均所得をはるかに上回った。さらに、多くの給与所得者が報酬の一部をストックオプションでもらっており、当時の価値は急上昇していた。今の会社にとどまるほうがずっと魅力的だったのだ。だから1990年代のシリコンバレーの起業率はアメリカの他地域に比べて推定で10~20%低かった。

当時のベイエリアの経済について、起業率が低かったのは資本が労働力に負けていたからだという言い方もできるかもしれない。資本は希少ではなかつた——アメリカも世界もハイテク経済に資金をつぎ込んでいた——が、当時最低だった失業率が示すように労働力は希少だった。シリコンバレーには実質的に余剰の労働力などなかつた。どの職種にも余っている人手などなかつたが、ハイテク企業を軌道に乗せるために必要なスキルの高いエンジニアとなればなおさらだ。新しいスタートアップ企業に人を入れるには、他の会社の社員を引っ張ってこなくてはならない。それには、会社でなんとか上げた収益のかなりの部分を社員への報酬として約束しなくてはならない。相対的に起業家自身の報酬は低くなる。

出典：ライアン・エイヴェント著 月谷真紀訳『デジタルエコノミーはいかにして道を誤るか 労働力余剰と人類の富』
東洋経済新報社 2017年（出題の都合上一部改変）

次の文章を読んで、以下の問い合わせに答えなさい。

【問1】 この文章を 500 字以内で要約しなさい。

【問2】 下線の「テーブルのうえの水」の動きは、何のどのようなことを例えているかを 200 字以内で説明しなさい。

【問3】 この文章の前章において、「影像は、われわれが一般に理解とよぶものであり、それは人間と獸に共通である。(中略) 人間に特有の理解は、かれの意志だけではなく、かれの概念や思考を、ものごとについての諸名辞を、連續と組みたてで肯定否定その他のことばの形式にすることによって、理解することである。」と書かれている。この表現を参考に、下線の「思考系列」のふたつの種類について、あなたの思考に対する考え方を 300 字以内で説明しなさい。

諸思考の連續または系列ということで、私が理解するのは、ひとつの思考が他の思考に継続することであって、それは心の説話とよばれる。

人が、なんであれひとつのものごとについて考えるとき、そのあとにつづく思考は、すべてが見かけのように偶然なのではない。それぞれの思考から思考へは、すべて無差別に継続するのではない。しかし、われわれが、かつてそれについての感覚を、全体的または部分的にもったことがないものにかんして、なにも影像をもたないように、ひとつの影像から他の影像への移行も、われわれがまえに類似のことを感覚のなかに、けっしてもったことがなければ、おこらない。このことの理由は、つぎのとおりである。すべての想像は、われわれのなかにある運動であり、感覚のなかでおこなわれた諸運動の残骸であり、そして、感覚のなかでたがいに直接に継続した諸運動は、感覚のあとでもやはり、いっしょでありつづける。まえのものがふたたび生じるようになって、しかも優勢であるかぎり、あとのものが、動かされた物質の凝集によってそれにつづくのであって、たいらなテーブルのうえの水が、そのどこか一部分を指によってみちびかれると、その方向へひっぱられるのと同様である。しかし、感覚においては、知覚された同一のものごとに、あるときにはあるものごとが、他のときには他のものごとが継続するから、結局、なにかひとつのものごとの造影について、何をわれわれがつぎに造影するかということの確実性はないことになる。確実なのはただ、それが、いつかまえに、同一のものごとに継続した、なにかであるだろう、ということである。

この思考系列すなわち心の説話には、ふたつの種類がある。第一は導きがなく、企図がなく、恒常的でないものである。そこには、ある意欲または他の情念がもつ終末と目標のように、それにつづいてくる諸思考を支配し方向づける情念にみちた思考が、ないのであり、そのばあいには、諸思考は、さまようといわれ、夢のなかでのように相互に適合しないようにみえる。仲間がいないだけでなく、なにごとにも関心のない人びとの諸思考は、ふつうはこのようなものである。そのばあいでも、かれらの諸思考は、他のときとおなじく多忙なのではあるが、ただ調和がないのであり、調子はずれのリュートを誰がひいても出る音、あるいは、調子があついていても、演奏できないものがひいたときに出る音のようなものである。そして、ここでたらめな心のさすらいにおいてさえ、人はしばしば、その道すじと、ひとつの思考の他の思考への依存を、知覚するであろう。(中略)

第二のものは、ある意欲および企図によって規制されているので、前者より恒常的である。なぜなら、われわれが意欲または恐怖するようなものごとによってつくられる印象は、強力で永続的であり、あるいは急速にもどってくる。ときどき、それはひじょうに強力で、われわれのねむりをさまたげ、やぶることがある。意欲から、ある手段についての思考が生じるが、われわれはその手段が、目ざしているものと類似のものを生みだすのを、見たことがあるのだ。それについての思考から、その手段への手段についての思考が生じ、こうして継続して、ついにわれわれは、自分の力のおよぶ範囲内の、ある端緒に到達する。そして、目的は、その印象のおおきさによって、たびたび心にあらわれるので、われわれの思考がさまよいはじめると、それらはすみやかにふたたび道にひきもどされる。このことは七賢人のひとりによって観察され、かれをして人びとに、終末を熟慮せよという、いまではすりへった格言を与えさせた。これは、あなたのすべての行為において、あなたがえようとおもっているものを、それを取得する道においてあなたの全思考を方向づけるものとして、くりかえしてながめるように、ということである。

出典：ホップズ著 水田洋訳「リヴィアイアサン（一）」 岩波書店 2021年（出題の都合上一部改変）

以上